

史料集の効用

野尻泰弘

はじめに

本稿は研究環境の整備と史料集の重要性について、『福井藩士履歴』の刊行から筆者が考えたことを述べる。ここでいう研究環境の整備とは、史料を利用・閲覧するためのツールや施設などの整備と、それらを作り上げ運用する人材の充実・育成までを念頭に置いている。史料集とは、古文書が広く活用されるため、くずし字を現代の書体に直し（翻刻）、体裁を整え出版したり、インターネットなどで閲覧できるようにデータ化したものを指す。

筆者は越前国を主たるフィールドとして、近世の村落史・地域史を研究している。村や地域を研究するには領主・領民関係にも目配りしなければならない。その点、『福井藩士履歴』は重要かつ貴重な研究ツールなのである。筆者自身の経験を踏まえながら、福井県の研究環境の整備と史料集である『福井藩士履歴』の効用について述べる。そして、最後に福井藩士の佐倉順天堂での医術修行について触れたい。

一、『福井県史』と福井県文書館

筆者が近世史研究を開始した一九九〇年代末は、『福井県史』の刊行が終了した時期である。『福井県史』は一九七八年から編纂事業が開始され、県内外における史料の存在と内容を広く調査することから始まった⁽¹⁾。この史料調査が歴史学では大変重要な作業なのである。歴史学は単なる興味深いエピソードの集まりではなく、根拠に基づく論理的な説明が求められる科学的な学術研究であり、何かを推測するにしてもある程度の根拠Ⅱ史料が必要なのである。福井県では戦

前・戦後を通じて、個人やグループによる研究活動、あるいは各自治体史編纂によって、史料に基づいたレベルの高い研究が行われてきた⁽²⁾。それを下地に福井県史編纂ではより一層史料を博搜したため、福井県の研究環境は向上したのである。

二〇〇三年の福井県文書館の開館も研究環境を考えるうえで特筆すべき出来事である。福井県史編纂の過程で撮影された史料が閲覧できること、膨大にある史料を横断的に検索できることなど、史料活用の利便性は飛躍的に向上し、広く恩恵をもたらした。この恩恵は県内外の研究者に對してだけのものではなく、先祖調べをする人、地域学習をする生徒・学生など、一般の人にとっても同様である。また、近年は過疎化などによって地域社会のあり方が大きく変化し、それまで地域で維持されてきた古文書などの保存も難しくなったため、文書館への史料の寄託・寄贈が増加している。文書館は現代社会の問題に関わる施設であり、人間の歴史的・文化的な営みを見守る施設なのである。

二、古文書を扱うこと

文書館や研究者が古文書とどのように向き合っているかを簡単に紹介しよう。近世史研究では、文献史料と称する主に江戸時代に記された古文書が用いられる。古文書は博物館や文書館で保存されている場合もあるが、それが生成された武家、寺社、村、個人宅などに残されていることも多い。まずは古文書がどこにあるかを確認する所在調査が行われる。次に古文書の所蔵者である個人や団体に連絡をとり、目的を説明し、古文書をみせてもらう。古文書をみるといっても、自分がみたくものだけを抜き取ってみることはしない。古文書一点ごとの内容索引・目録を作成し、全体の概要を把握してから古文書を一点ずつみるのが現行の一般的な古文書取り扱い方法である。だが、江戸時代の古文書が数点だけ残っていることは少ない。実際は、近代以降のものも含め、大量の史料が保存されている場合がほとんどである。数百から数万点にわたる古文書の目録を作

るのは、膨大な労力と時間を必要とする。

古文書所蔵者との面談から始まり、目録作成、古文書の公開・利用に至るまで多くの人手が必要になるが、それは古文書の生成や保存、取り扱い方、解読方法を学んだ人でないと対応が難しい。そのような技術は、大学の史学科や博物館・文書館などの市民講座を通じて人々に伝えられるが、それを学ぶには長い時間を要する。つまり、古文書を扱う人材を得るには、時間と学習の場が不可欠なのである。

三、史料集を作る意義

古文書には情報が詰まっているので、その古文書の画像をそのまま公開すればよいという考え方もあるだろう。その方法も有効である。しかし、古文書はくずし字で書かれており、読むのが難しい。だから、くずし字を楷書体に直した(翻刻した)史料集が便利である。古文書の翻刻データを作成すれば、検索も容易になり、インターネット公開による利用の広がりも期待できる。

ただし、古文書の文章は江戸時代特有の文体であるため、文字を楷書体に直したとしても読解は難しい。それならば口語訳するという案もあろう。しかし、古文書などの史料は読み手によって重視するポイントが異なり、また研究の進展や他の史料との比較によって史料の読み方も変わる。つまり、読解・解釈には読み手自身のオリジナリティが生じるのである。だから翻訳者自身の解釈が入り込む口語訳は、独自性を重視する研究に使うことが避けられる。オリジナルな研究の根拠として信用される史料と、読み物として楽しむ口語訳とは性質が異なる。

二〇〇五年以来、福井県文書館では『福井県文書館資料叢書』を一五冊刊行した。これらはインターネットでPDFとして公開されており、容易にキーワード検索ができる。キーワード以外にも重要な記述があるため、史料集は一頁ずつ手でめくって研究の基本であると思うが、研究のやり方は幾通りもある。研究の手段が増えることは、新たな研究の呼び水になる。

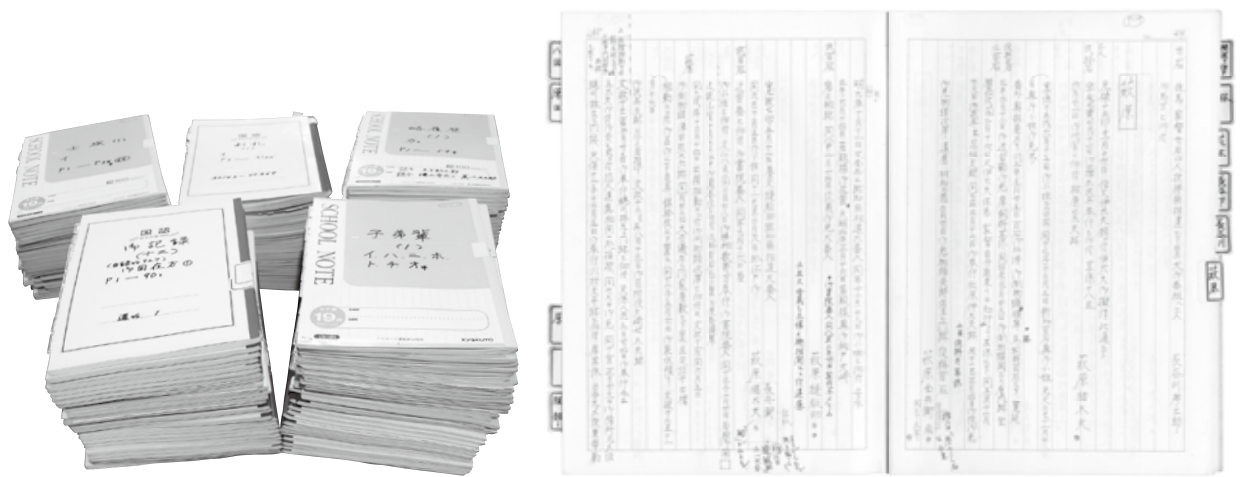


写真 田原健子氏筆耕ノート（156冊、約380万字）

先述の目録作成や史料翻刻などの作業は、主として近世史を学ぶ学生・大学院生が担ってきた。だが、福井県内には史学科を有する大学がない。県内で目録・翻刻に携わる人材を確保することが難しいのであれば^③、県外の人に福井県に足を運んでもらい、福井県の研究をしてもらえばよい。そのために魅力ある史料が存在することを示し、研究しやすい環境を整えて大学や研究者、学生を呼び寄せる工夫も必要である。史料集の作成は、その工夫の一つともいえよう。地域に最も詳しい史料保存機関の職員と県内外の人との協働は、新しい発見や活動を生み出すことになる。近年は歴史を観光資源として活用する動きも目立っているが、一時だけ耳目をひくような活動は本当の意味での地域理解とは程遠い。地域の未来について考える盤石な基礎を築くため、学術研究の拠点としてアピールすることが求められる。

四、『福井藩士履歴』刊行の影響

二〇〇〇年代初頭（福井県文書館開館前）、筆者は鯖江藩と福井藩の関係を藩・藩関係ととらえ、地域史研究の研究視角とすることを構想したが^④、研究は軌道に乗らなかった。鯖江藩は一三〇村・五万石の藩領であり、大雑把ではあるが全体に目配りすることが可能であった。藩に関する基礎的な史料として『間部家文書』全五巻（間部家文書刊行会、一九八〇～一九八八年）、藩士の人事記録として「鯖江藩御家人帳」「小頭以下代数書」（『鯖江市史』史料編第五巻・第六巻、鯖江市史編纂委員会、一九七七～一九七九年）が刊行されており、東京在住であっても研究に着手しやすかった。しかし、福井藩三万石の藩領や藩政機構はあまりに大きく、県外在住の者にとっては研究しづらかった。その原因として、①幕末を除くと個別具体的な研究蓄積が少ないこと、②藩や地域に関する史料集が少ないことがあげられる。松平文庫や村々にある豊富な史料については『福井県史』資料編により存在を知っていたが、遠方にあつてはハードルが高い研究対象だったのである。

ところが、二〇一三年に『福井藩士履歴』の刊行が開始され、筆者は大きな衝撃を受けた。藩領を研究するには、藩政を担う上級家臣や村を管轄する藩役人についても知らなければならぬ。その際、重要なツールとなるのが『福井藩士履歴』のような人事記録なのである。このような基礎的な史料集が刊行され始めたことで、福井藩に関する新たな研究が展開すると思った。当時、筆者は東京に職を得たこともあり、大学図書館で閲覧できる関東の史料として下総国佐倉藩（二万石）のマイクロフィルム史料⁽⁵⁾をみていた。佐倉は東京近郊にあり、容易に史料を閲覧できるにもかかわらず、佐倉藩の研究はあまり多くなかった⁽⁶⁾。その理由はいくつかあるが、とくに基礎的な史料集の整備が遅れているためであると考えた。これはかつて福井藩の研究について感じたことと同じ構図である。そこで研究を展開させる史料集を作成しようと思った。二〇一四年、筆者は数名の仲間と近世後期の佐倉藩の人事記録である「分限帳」の翻刻を始め、二〇一九年三月に『史料集 佐倉藩幕末分限帳』（私家版）を刊行するに至った。これは『福井藩士履歴』の刊行に触発されたものである。

五、佐倉順天堂における福井藩士の医術修行

地域史を考える場合、ある地域に軸足を置き、そこを中心に検討することが多い。一方で、その地域に生きた人たちが他地域で行った活動も地域史の一面といえる⁽⁷⁾。『福井藩士履歴』から下総国佐倉で医術修行に励んだ福井藩士について検討する。佐倉には蘭医学塾の佐倉順天堂があり、全国から多くの人が訪れた⁽⁸⁾。佐倉順天堂は、蘭学者佐藤泰然により天保一四年（一八四三）に開設された。安政六年（一八五九）、養子の佐藤舜海が家督を相続してこれを引き継いだ。舜海は万延元年（一八六〇）一月から文久二年（一八六二）三月まで長崎で医術を学んでいた⁽⁹⁾、この間は泰然が佐倉順天堂の経営にあたった。明治二年（一八六九）、舜海が明治政府の招聘により大学東校の責任者として上京すると、門人岡本道庵がこれを継いだ。

表 佐倉順天堂に関連する福井藩士一覧

	氏 名	禄 高	修行前後の主な役職	医術修行関連記事	出典
1	浅野嵩三（共斎）	100 石	嘉永 2 年 7 月 11 日：表医師 文久 2 年 5 月 28 日：奥医師	万延元年 4 月 5 日：佐倉にて綱帯術修行仰付。 万延元年 11 月 9 日：願いのうえ佐藤舜海の長崎行に同道仰付。 文久 2 年 4 月 17 日：帰着。	履歴 1、 100 頁
2	佐藤甫（宗輔）	10 人扶持	嘉永 7 年 4 月 13 日：奥鍼医師・本道兼帯雇 安政 2 年 7 月 23 日：奥医師 慶応 4 年 5 月 晦日：匙医師格	文久 2 年 4 月 13 日：内願もあり下総佐倉の佐藤舜海へ医業相手寄仰付、勝手向難渋につき修行中 3 人扶持くださる。	履歴 3、 148 頁
3	野村隆琢（信平）	20 石 4 人扶持	元治元年 4 月 5 日：一代表医師	慶応元年 7 月 13 日：佐倉での修行中難渋の内達あり月々 2 両御手当くださる。 慶応 3 年 3 月 5 日：佐倉より帰る。	履歴 5、 7～8 頁
4	針谷恒人（玄春、雲沢）	10 人扶持	嘉永 2 年 10 月 20 日：表医師	万延元年 4 月 17 日：佐倉にて綱帯術修行仰付。 文久 2 年 3 月 26 日：内達もあり佐藤舜海へ相手寄医術修行仰付、修行中 3 人扶持くださる。	履歴 5、 104 頁
5	細井博（專博）	100 石	慶応 2 年 11 月 1 日：表医師	文久 2 年 12 月 20 日：医術修行のため佐倉へ、修行中 3 人扶持くださる。	履歴 5、 234 頁
6	益田端三（宗三）	200 石	安政 5 年 10 月 17 日：表医師 安政 7 年 3 月 11 日：奥医師	万延元年 11 月 6 日：佐藤舜海の長崎行に同道・修行仰付。	履歴 5、 269 頁
7	馬淵竜衛（玄仙）	100 石	嘉永 7 年 5 月 3 日：表医師 元治 2 年 2 月 27 日：奥医師雇・京都詰	文久 2 年 7 月 20 日：匙医師より内達もあり佐倉にて佐藤舜海へ相手寄修行仰付、修行中 3 人扶持くださる。同 8 月 23 日出立。	履歴 5、 284 頁
8	大岩貫一郎（貫一）			慶応元年 7 月 13 日：佐倉での修行中難渋の内達あり月々 2 両御手当くださる。 慶応 3 年 5 月 11 日：来春迄佐倉にて修行願い済み、さらに当分修行のうえ他国修行を願ひ仰付。	履歴 7、 25 頁

『福井藩士履歴』1～7 より作成。出典では『福井藩士履歴 1 あ～え』を履歴 1 のように略記し、参照した頁も示した。

天保一四年から明治二年まで佐倉順天堂で学んだ門人は、数百名から千名を超えると推定される⁽¹⁰⁾。慶応元年（一八六五）閏五月の門人帳「佐倉順天塾社中姓名録」には、九八名の門人が記されている。そのうち現在の福井県出身者は一六名で、門人の出身地では最多である。そして一六名中七名が福井藩士である⁽¹¹⁾。七名の福井藩士は、大岩貫一、山本淳良、蘆野三省、妻木立斎、野村信平、勝沢一字、星野道的である⁽¹²⁾。このほかに佐倉順天堂や佐藤泰然・舜海に学んだ福井藩士の有無を確認するため、『福井藩士履歴』を検索する。

検索にあたり、泰然、舜海、尚中、順天堂、佐倉、下総、総州をキーワードに設定した。舜海はのちに尚中と名乗るため、尚中もキーワードとした。順天堂とsoの所在地である佐倉に加え、国名である下総・総州もキーワードとした。これらの語について『福井藩士履歴』一七七を検索し、舜海、佐倉、下総がヒットした⁽¹³⁾。ヒットした語から八名の福井藩士が浮上したが、このうち大岩・野村以外の六名は先述の門人帳に記載されていない。八名の福井藩士の履歴について医術修行を中心に概観しよう（表「佐倉順天堂に関連する福井藩士一覧」参照）。

検索でヒットした八名の修行の時期は、万延元年四月から慶応三年五月である。門人帳「佐倉順天塾社中姓名録」は慶応元年閏五月のものである、これ以前から福井藩士が佐倉順天堂で学んでいたことがわかる。また修行の時期から考えて、八名の者たちは佐藤舜海に師事していたとみられる。舜海が長崎で学ぶにあたり、浅野嵩三・益田端三はこれに同道した⁽¹⁴⁾。このうち浅野は「願之上同道」とあるので自ら

長崎行きを願ったとみられる。益田はこれ以前に佐藤舜海と手紙のやりとりがあり、舜海と面識があつたためか、藩命により長崎へ向つたと思われる⁽¹⁵⁾。

佐倉での修行期間がわかるのは大岩と野村である。大岩は一年一〇ヶ月以上修行したようである。野村は慶応元年閏五月の「佐倉順天塾社中姓名録」にも記載があり、慶応三年三月に佐倉から帰っているので、少なくとも一年一〇ヶ月は修行していたとみられる。修行内容⁽¹⁶⁾はほぼ不明だが、浅野・針谷は「繙帯術」を学んでいる。

『福井藩士履歴』によって、佐倉順天堂で学んだ者たちが新たに判明した。それは名前と修行時期など、わずかな事実かもしれない。だが、インターネットの普及によって様々な情報を検索できるようになった現在、わずかな事実を手掛かりに、思わぬ場所から意外な史料やまた新たな事実が浮かび上がってくる。史料集には、多くの情報を提供することで地域史研究の展開を促す効用があるといえよう。

おわりに

地域の歴史を学ぼうとすると、ある特定の人物の業績を顕彰したり、ある事柄から当該地域の先進性を誇示したりするような取り組みを目にすることがある。また近世でいえば、地域で中心になるような藩や幕末の動向ばかりが注目され、その他の領主によって統治された地域や近世全期にわたる動向は見落としがちである。さらに、近世の領地は必ずしも現在の行政区と一致しないこともあり、自治体史編纂の過程で分析が及ばない地区が生じることもある。古文書など史料の残存状況には地域や時代によって偏りがあるため、研究の進展度合いにも差が生じることは仕方がないことだが、地域を総体として理解する意識は持ち続けていたい。

地域には様々な歴史があり、それらはその地域に暮らす人々の現在につながる貴重な営みである。長く続く営みは人々の不断の努力によって継続される。その努力は日々の生活に根差したも

のだから派手さはなく見過ごされがちだが、古文書の中の一字一句に日常の努力が刻み込まれていることを肝に銘じたい。古文書から丁寧に歴史事実を掘り起していくことが、地域理解を深める確実な方法であろう。そして、地域の歴史はその地域だけで完結するものではなく、近隣から遠方へ、さらに外国にまで関係する。地域の内外から歴史と文化を眺める姿勢が大事である。研究環境や史料集を整備することは、福井県について県内外から問いを発し、福井県に関わる歴史を日本や世界の歴史に位置づけることになるだろう。

註

- (1) 『福井県史』索引・県史編さん記録（編集発行：福井県、一九九八年）。
- (2) たとえば、牧野信之助編『越前若狭古文書選』（三秀舎、一九三三年）、小葉田淳編『岡本村史』全二卷（岡本村刊行会、一九五六年）、一九五二年発足の福井県郷土誌懇談会（会誌『若越郷土研究』）、一九七〇年より活動が続ける福井県地域史研究会（会誌『福井県地域史研究』）などがある。
- (3) 『福井藩士履歴』に関する筆耕は田原健子氏のボランティア活動によるという（『福井藩士履歴』1の吉田健「解説」参照）。その労力にあらためて敬意を示したい。だが、ボランティアに頼り過ぎたり、史料集を作成することが難しい現状は問題である。福井県としての継続的・組織的な事業を切望する。
- (4) 藩・藩関係については、拙著『近世日本の支配構造と藩地域』（吉川弘文館、二〇一四年）参照。
- (5) 『下総佐倉藩堀田家文書』（雄松堂フィルム出版、一九八九年）。
- (6) 佐倉藩に関する研究については、土佐博文「佐倉藩政史研究の現状と課題」（『地方史研究』三四六、二〇一〇年）参照。また、藤方博之「近世大名家内部における「家」々の結合とその共同性」（『歴史評論』八〇三、二〇一七年）など、佐倉藩に関する一連の研究を参照。
- (7) 熊澤恵里子「他国修行―福井藩教育改革の軌跡―」（『福井県文書館研究紀要』第9号、二〇一二年）など参照。
- (8) 佐倉順天堂、佐藤泰然、佐藤舜海などについては、村上一郎「蘭医佐藤泰然」（大空社、一九九四年。初出は発行所・房総郷土研究会、一九四一年）、小川鼎三「佐藤泰然伝」（順天堂史編纂委員会、一九七二年）、『順天堂史』上巻（学友社、一九八〇年）によった。
- (9) 佐藤舜海は万延元年十一月二日に江戸上屋敷を立ち、同年十二月二日に長崎に着いた。その後、文久二年一月二五日に長崎を立ち、同年三月六日に江戸帰着、三月一四日に佐倉へ帰った。舜海の長崎滞在は一年一ヶ月で

ある。『順天堂史』上巻、五二七～五四一頁によった。

(10) 佐倉順天堂の門人については、『順天堂大学医史学研究室所蔵 佐倉順天塾社中姓名録』（佐倉市教育委員会、一九九二年）、『佐倉順天堂門人調査中間報告書』（佐倉日蘭協会、一九九六年）、土佐博文「佐倉順天堂門人とその広がり」（『国立歴史民俗博物館研究報告』第一一六集、二〇〇四年）によった。

(11) 一六名の内訳は福井藩士七名、鯖江藩三名、府中藩二名、大野藩二名、勝山藩二名である。

(12) この七名のうち、『福井藩士履歴』1～7に記載があるのは大岩・野村・勝沢だが、勝沢の履歴に佐倉順天堂で学んだ記述はない。大岩・野村は後述する。

(13) 「下総」は「本多下総守」としてヒットしたが、これは除外した。泰然、尚中、順天堂、総州は検索でヒットしなかった。ただし、『福井藩士履歴』の解説でヒットしたものは除外した。

(14) 佐藤舜海は長崎行きに際し、福井藩主からの特別な依頼により同藩の藩医二名を召連れていた。二名の藩医は浅野と益田であろう。『順天堂史』上巻、五三四頁では、このような佐倉順天堂や佐藤舜海と福井藩の深い関係が指摘されている。

(15) 佐藤舜海の長崎行き以前、佐倉順天堂では福井藩士岩佐純と益田が学んでいたという（『蘭医佐藤泰然』一二二頁参照）。万延元年七月、岩佐は蘭医ポンペに学ぶため長崎行きを藩から命じられている（『福井藩士履歴』1、二二八頁。「岩佐玄桂」の項参照）。益田については福田源三郎『越前人物志』中・下巻（玉雪堂、一九一〇年）「益田宗三」の項を参照。ここでは、岩佐の長崎行きを泰然が羨ましく思う旨の泰然から益田に宛てた手紙などが掲載されており、彼らの関係がうかがえる。

(16) 越前国の医師や医療については、海原亮『近世医療の社会史』（吉川弘文館、二〇〇七年）、同『江戸時代の医師修業』（吉川弘文館、二〇一四年）を参照。

参考資料

各資料と家格などとの関係

福井藩家臣団の家格別人数
(嘉永5年)

家 格	人 数
本多家	1
高知席	16
高 家	2
寄合席	38
定座番外席	14
番士（役番外	106
番士（大番など	495
新番・新番格	81
医師・絵師など	49
士分合計	802
与力	39
小役人	84
一統目見席	87
小算・坊主・下代	347
諸組（足軽）	1,341
卒合計	1,898
家臣団総計	2,700

・荒子・中間等の小者973人を除く
・舟沢茂樹氏「福井藩家臣団と藩士の昇進」
『福井県地域史研究』創刊号 1970年による

剥
札

士
族

「かよたれそ」
欠

子弟輩など

士族略履歴

「よたれ」欠

新番格以下

増補
雑輩
など

諸役人并町在御扶持人姓名

旧藩制役成

子弟輩剥札掲載の理由

「剥札」は現役当主（「士族」掲載）を除く引退当主の記録であるが、子弟輩における剥札は、一家を立てたり他家の養子になったりすることがなかった者が記載されている。ここではそれぞれの剥札に記載された理由をあげた。

名 前	理 由
岩上直作	戦死（戊辰戦争）
今川源重郎	退身
石沢万太郎	囲入置
伊黒運吉	—
林健介	病死
畑中浩	病身退身
波々伯部徳次郎	出奔 士籍取放
原田鉄弥太	病死
堀万吉	病死
本多鉄吉	—
富永弥六	病死
大河原欣吾	病死
大館清蔵	出奔 士籍取放
大町綱三郎	出奔
岡谷勝太郎	出奔 士籍取放 病死
岡部八男雄	他藩へ養子
奥村坦蔵	病死
大崎亮蔵	病身退身
大橋清三郎	—
小栗篤三郎	—
岡部十万記	病死
大橋左一郎	士籍被脱
大橋勉二	病死
川村正太郎	退身
河合弥藤太	出奔 侍御削
川崎良精	—
河崎山十郎	出奔 侍御削
鱒江左平次	—
加藤万三郎	—
吉樹源助	—

名 前	理 由
武田庫次郎	病死
高久将太郎	病死
田辺錫	他藩へ養子
恒岡斧吉	—
中山万四郎	死
成瀬八三郎	—
内海元策	—
野治彦之助	病死
桑島小三郎	侍御削
八木八十八（日下部太郎）	病死
八木次郎吉	病死
山田七之助	病死
八木三郎	病死
馬淵玄亀	他藩へ養子
福山繁次郎	—
藤田平吉	謹慎 過料銭
小木登太郎	侍御削
近藤源八	侍御削
佐々木泰介	—
酒井健次郎	侍御削
酒井良吉	出奔 士籍取放
斎藤源九郎	病身退身
毛受勝助	病死
皆川徹雄	脱走 閉門
下山惣十郎	病死
榎並猪十郎	病死
榎並鋪馬	出奔 侍御削 病死
鈴木郁郎	帰商
須崎英吉	出奔 士籍被脱

注）本文記述から剥札掲載の理由が不明な場合には「—」で示した。

福井藩士履歴 7 子弟輩

福井県文書館資料叢書 15

平成三十一年三月十五日 発行

編集発行 福井県文書館

九一八―八二二三

福井県福井市下馬町五一―一一

電話〇七七六―三三―八八九〇

印刷 創文堂印刷株式会社

九一八―八二三一

福井県福井市問屋町一―七

電話〇七七六―三二―三三三(代)

